＜旅のはじまり＞

この旅は地球環境「自然学」講座自主企画としてＦさんからお誘いがあった。昨年参加した方から、森でのキャンプは相当冷えて、また、川舟クルージングも冷たい風が強く吹いて大変だったと聞いていたので、少し躊躇したが、このような機会はこの先そんなに無いだろうと、また表題にも示したタイガの森にも興味があったのでお願いすることになった。

まず旅の行程を簡単にお示ししましょう。シニア自然大学関係 11 名（自然学講座生 8 名）と東京からの一般参加 4 名（ヤング）と旅行業者のワイルド・ナビゲーションの宮田社長さんの総勢 16 名。9 月 16 日から 7 泊 8 日の旅である。伊丹を出発し成田で東京組と合流し、S7 航空でハバロフスク（約 2 時間半）へ。その日はハバロフスク泊。翌朝バスで 4 時間半かけて、ビキン川のタハロ橋へ。さらに、小さな木製川舟（狩猟＆漁労用）で 1 時間半のクルージングでホームステイ先の狩猟の民が住むクラスヌイヤール村へ。それぞれステイ先に分散。翌朝、再び川舟で 3 時間（約 50km）ビキン川を遡上、国立公園内（世界自然遺産）にある狩猟小屋でキャンピング。ウスリータイガの森とフィッシングを満喫し再び村に帰りホームステイ。村内の見学と村民との交流会。ハバロフスクに戻り町を見学し、翌朝帰国となった。ちなみにハバロフスクから村までは約 300km の行程であった。

＜クラスヌイヤール村のホームステイ先へ＞（右図参考）

ハバロフスクで通訳のミーシャ（ハバロフスクの大学で日本語専攻）とスラバ（日本での仕事の経験あり）の両氏に合流。バスでビキン川のタハロ橋（約 260km）まで向かう。ハバロフスクの町を過ぎると、湿原や草原（伐採 or 畑地跡か）と白い樹肌が美しいシラカバ林が続いた。

途中休憩を取った小さな村以外はまったく民家をみなかった。

超ワイルド感のあるビキン川の遡上！

4 時間半かけてビキン川にかかるタロハ橋に着くと川岸に 7 隻ほどの川舟と村人が待機していた。村からのお迎えである。ビキン川はアムール川の支流ウスリー川のそのまた支流と聞いていたので小さな川だと思っていたがそうではなかった。かなり川幅が広い。水はいかにもフルボ酸鉄（豊かな海の素、後述）がたっぷり含まれているような緑～茶系の色をしていた。水量も豊富であった。後で日本最長の信濃川よりも長い川（560km）だと知った。川舟に 3 人程度ずつ分散し、両側に針葉樹と落葉広葉樹の混交林のタイガの森を見ながらヤマハの船外機（40 馬力）はフルスピードで村に向かう。舟からは今までに見たことがない景色が続く。

舟が村に着くと周りが騒々しくなった。どうやら、ナターシャさん（村に滞在中の世話役）を中心に我々のステイ先の割り振りをしているようだ。順次お迎えの車で散っていく。その中にはナンバープレートを付けていない車もあった。おおらかなものだ。村は私には西部劇に出てくるような光景に写った。我々は 3 人（S 氏＆H 氏）でガリーナ宅へ向かう。ホームステイは若い方には馴染みがあるかも知れないが、我々シルバーはそんなことを経験したことがない。まして、ここはロシアの辺境地。何が何だかわからないままにステイ先に着くとガリーナさんと息子（ユーラ君 26 歳）と娘（リエラちゃん 12 歳）が迎えてくれた。ロシア語はちんぷんかんぷんである。相手も日本語はちんぷんかんぷん。手まねで食事においでをしてくれた。我々と同じ顔をしているので日本語が通じないのが不思議な気分になった。有難いことにガリーナさんは若いころハバロフス

お世話になったガリーナ家族（奥 4 人）

ガリーナ宅

クで小学校の英語教師をしていたので英語が通じた。と言っても私は話せない。S 氏が少しできたのでとても助かった。料理をいただきながら片言の英語でコミュニケーションをとるもどれほど通じていたか甚だ疑問である。最初の乾杯はウォッカではなくコニャックのストレートだった。パンと魚のハンバーグ、ボルシチなどたくさんの料理をおいしくいただいた。3 人にはそれぞれ個室が用意されていた。リビングのソファーで息子が寝ていたのをあとで知った。どうやら彼の部屋も我々が占拠したようだ。ということで村での第一日目が終わった。明日から二日間はここを離れるが、その後、再び二泊させていただく予定である。ちなみに、家はスチームの暖房と薪ストーブがあり、電子レンジも冷蔵庫もテレビもパソコンもおおよそ私たちが持っているものはあった。

＜いよいよタイガの森へ入る＞

昨日、降下した川を今日は逆に遡上して、約 50km 上流のタイガの森にある彼らの狩猟の基地に向かう。2 時間半のクルージング。昨日来た橋を通過すればすぐに国立公園の入口だ。そこで全員下船して公園監視官の検問を受け、許可が下りて再び遡上する。針葉樹も多くなってきた。両側にすばらしい森が広がる。河畔はケショウヤナギ（ヤナギ類）とカバノキ類が多かった。既に紅葉（圧倒的に黄色系が多い）し始めていて、素晴ら

しい。日本では想像できないダイナミックでワイルドな景色。まさに今回お世話になっている旅行会社名のワイルド・ナビゲーションである。私は、日本の川はアユと渓流釣りでかなり知っているつもりであるが、ここは日本の川とは様相が全く違う。それを最も感じたのは河畔林の倒木と、それが川に流れ出した流木とがとても多いこと。原生林の森に包まれた川はこれが普通なのかもしれない。自然の攪乱による倒木更新も活発に行われているのだろう。日本では多くの川の流域は開発されて、その周辺にはこれほどたくさんの木は残っていないので、このような光景はお目にかかれない。堤防も全くなく川は自由に、そして悠々と流れる。そのためか頻繁に流路が変わるのであろうか、たくさんの中洲や溜まりがある。ここはロシアのアマゾンと言われている。映像でしか知らないアマゾンではあるがよく似ている感じもする。違いは、ここは、秋には木々が見事に紅葉（黄）し、冬には落葉するなど四季の森があることか。道が無いので、狩猟にはもっぱら川舟を使う。冬季は川全面が凍るとのこと。むかしはソリで、今はスノーモービルを使うらしい。

川岸に堆積するたくさんの倒木

＜クラスヌイヤール村とビキン国立公園＞

ここで村のこととビキン川流域が国立公園になった経緯について少し詳しくお示ししましょう。クラスヌイヤール村の人口は約650人、その内訳はざっとだがウデヘ人450名、ナナイ人100名、ロシア人100名である。ウデヘ人はロシア全体でも現在1,600人程度とのこと。ナナイ人とともにロシア内では先住少数民族と位置づけられている。古くはツングース系の北方民族で、女真族の末裔といわれている。女真は満州を中心に勢力を持ち、金王朝を築いた。ビキン川流域は近世には中国の清朝の支配下にあったが、ロシア帝国の進出があり、1860年の北京条約でウスリー川東岸はロシアの領土となり今日に至っている。民族という定義は難しいが言語の違いを基準として捉えることもできる。ちなみにウデヘ語なるものがあるそうだ。もっとも、ロシア国民になった今、ライフスタイルもロシア化されており、ウデヘ語がしゃべれる人もほとんどいなくなったとのこと。日本を考えてみると大和民族とは別に独自の言語を持ったアイヌ民族の存在との関係に似ているようだ。もっとも今は日本国民であるが・・・。少数民族はどこでも大国に翻弄された歴史があるように思う。なお、ペレストロイカ前の社会主義ソビエト連邦の時はソフォーズやコルフォーズと同じような組織（国営企業）で狩猟に従事していたという。

アムールトラの生息を示す標識
数が減り滅多に見られない

この地域は広大なタイガの森が続く。森林資源としての価値も大きい。シベリア鉄道の敷設で森林開発が進み、日本や中国・韓国に向けて木材輸出が盛んに行われた。1992年にはロシア沿海地方知事が、ロシア・韓国の合弁企業にビキン川上流の森林開発を許可。チョウセンゴヨウ（タイガの主要な針葉樹）は新潟経由で日本に入ってきた。これに対して、村の人々は危機感を感じ、自分たちのタイガの森を次世代に残そうと村やウラジオストクなどの街で反対運動を起こし、ビキン流域の伐採計画の見直しを訴えた。これに呼応した国際NGOの活動は伐採計画に対して国際社会の関心を呼び起こした。日本でこの運

動の中心になった人物が 5 月に大阪で講演いただいた野口栄一郎さんである。そして、それら一連の運動が実って、ついに 2015 年 11 月 3 日、極東ロシアのビキン川流域の 116 万ヘクタールにのぼる森林が「ビキン国立公園」として指定された。針葉樹と広葉樹が混じるこの豊かな森は、シベリアトラ（アムールトラ）の全個体数の 1 割（50 頭程度）が生息する場所であると同時に、先住民の重要な生活の場でもある。国立公園の制定では、その豊かな自然が守られるだけでなく、ロシアで初めて国立公園における先住民（ウデヘとナナイ）の権利（狩猟など）も明確に保障されたとのことだ。なお、その大きさは秋田県と同程度とのことで、今年世界自然遺産に登録された。

＜狩猟場にあるキャビンで過ごす＞

キャビンでの生活

検問を受けて約 1 時間で目的地に着く。ここは狩猟をする時のベースキャンプになる場所とのこと。作業小屋、キャビン、食事ハウスなどがあり、ここをベースにさらに森深くまで何日も猟をする。基地の周囲にはそのための宿泊小屋がいくつもあるという。クロテンの毛皮はお金になり、イノシシ、シカは食料となる。ゲストの我々はキャビンで二泊した。現地案内人、スタッフはテントを張る。キャビンは薪ストーブで暖かかったがテント組は二日目の朝の気温が 1.8 度まで下がったので大変だったと思う。夜空に映る星がきれいすぎる。星の光がまぶしいくらい強いのである。星座に詳しいＴ氏のお話に全員耳を傾けた。冷える夜はキャンプファイヤーが最高だった。同行してくれた村人が森川の恵であるイノシシ、シカ、魚をロシア風においしく料理してくれた。釣った魚のムニエルは特に美味かった。

森の散策

狩 猟 場
チョウセンゴヨウの葉
種を食われた松ボックリ
松ボックリの中の種

この森はウスリータイガと呼ばれアムールトラを頂点とした生態系が構成され、生物多様性が高く注目されている。そこを若手の猟師さんが案内してくれた。日本の森を歩いているような気分になった。というのも樹木は北海道に似ているように感じたからだ。木の背が高くどんな葉っぱをつけているのか見づらいので落ち葉を見てみた。黄色のカバノキ類と5本の葉っぱが付いたマツ葉をたくさん見つけた。マツは

この森を代表するチョウセンゴヨウである。葉は日本のゴヨウマツより長かった。日本のより大きな松ボックリがたくさん落ちている。中の種は大半がかじられている。リスやイノシシの仕業らしい。彼らの貴重なエサとのこと。人間が食べても美味しい。日本の松と違って種に翼がついておらず大きい。お土産に買ったが評判はすごくよかった。そのほかにナラ類やヤマナラシにモミジ類、イチイ、モミの木もあった。

タイガはツンドラの次に寒い土地で北海道よりも寒く樹木は寒さに強い針葉樹だけだと思っていた。ところがここはそうではなかった。針葉樹（チョウセンゴヨウ等）に落葉広葉樹が混ざった混交林となっていた。ウスリー川一帯は、一般にタイガと呼ばれている土地より気温が幾分高いそうだ。そのため、落葉広葉樹も生存できる。とはいっても、大陸性気候のゆえであろうか、この森を流れる川は冬期には全面凍るとのことだ。厳寒期は北海道の寒さの比ではないのだろう。散策の最後にとっておきの場所？に案内された。登りつめて小高い丘に着くと眼下に絶景が広がった。人工物ゼロの大パノラマである。川沿いはヤナギ類と落葉広葉樹、その奥には針葉樹と広葉樹の混交林が広がっていることが遠目でも樹形や葉色でわかる。すでに落葉広葉樹は黄に色づき始め、緑の針葉樹とのコントラストが非常に美しい。豊かな生態系をイメージするには十分すぎる景色であった。写真（トップページ）をお示ししたもののこれではその素晴らしさが表現できていないので残念・・・。

フィッシング

カワカマス

アメマス

コクチマス

カワヒメマス

ビキン川で釣れる代表的な魚は 4 種類。最も有名で釣り人に人気があるのはアムールイトウである。今では幻となった日本のイトウとは別種だが、こちらでも数が減り、そう簡単には釣れないとのこと。キャビン近くでスラバ氏（通訳）が手ほどきに川岸から浮子を付け、毛ばりで釣ったのがカワヒメマスという小型の魚である。日本のヒメマスとは全く違う魚であるが、とっても美味で、ムニエルやお造りで出してくれた。夕刻に猟師のニコライさんが今晩のおかずにとどっさり釣ってきたのは 30～40 ㎝のコクチマス。これも旨い。日本にいないが、長野県ではこの近縁種を輸入し信濃サーモン（シナノユキマス）として売り出している。もう一つ別の大きな奴は 80 ㎝級のカワカマスであった。これも日本にはいない。顔は獰猛、歯が鋭く咬まれては大けがをする奴だ。ここにはとてつもなく大きなものがいるようだ。これだけ見せつけられて悶々としていたら、釣りをしたい方は明日お誘いするとのことであった。翌日の昼からボートでフィッシング。本流ではなく入江に入った。ワクワクしながら彼らが用意してくれた竿に 20ｇ程度のスプーン系（ゴールド色）のルアーをつけて投げた。最初に、S さんに、続いて H さんにカワカマス（いずれも 45ｃｍ級）がヒットした。お二人とも釣り歴なしの方である。私には一向にあたりが出なかった。ボーズを覚悟したが、最後にポイントを変えてもらってラストチャンスにかけた。ついにガ

ツンと来た。45cm のカワカマスであった。やれやれ、これで面目が立ちホッとした。続いて、アメマス（40 cm級、日本にも同種のものが生息する）がヒットした。さらに、立て続けにカワカマスを釣り、短時間で 5 匹を釣り上げた。最長は 60 cm程度のカワカマスであった。釣り好きの私はいったん火が付くと夢中になってくる。明日からの計画はすべてキャンセルし、最終日まで釣りに没頭したい気持ちになった。真剣に狙えばもっと大きな、そしてイトウも狙えると実感した。

＜再び村に戻って＞

猟場のキャビンで二泊して、再びステイ先に戻った。何か自宅に戻ったような気持ちになり心が落ち着いた。早速バーニャ（こちらで日常的に利用されているロシア式サウナ）を用意してくれていた。さっぱりした後は、ガリーナさんの手作りの夕食（シカ肉の野菜スープなど）をいただいた。食後に、彼女は娘さんと二人で歓迎の意を込めて鶴の舞いのような踊りを披露してくれた。ユーラ君はギターの弾き語りをしてくれた。我々はこんな上手なもてなし方はできない。取り敢えずお返しにヘタな歌（カチューシャなど）を披露した。リエラちゃんは大和撫子を思わせるおしとやかでかわいい子であった。当初は少し緊張していたようだったが、S さんがお土産の折り紙で鶴を折ってみせると一気に緊張が解けたのか近寄ってくれた。折り紙が子どもとの交流にこんなに役に立つのかとびっくりした。初日は話が通じなくて大変だったが今日はユーラ君が気転を効かせてくれた。彼のスマホの翻訳アプリを活用して日本語とロシア語を交互に変換した。このおかげで、かなり話が通じた。お互いに家族のこと仕事のことなどの話が進み楽しく時間が持てた。彼は 26 歳。工芸学校に学び、今はシカやクジラの骨を利用して工芸品を作っているとのこと。長男は軍隊に入り国境を警備しており、長女も家を離れて働いている。ここから 150ｋｍ離れた所で車の整備の仕事をされているワーシャさん（夫）がラム酒のお土産をもって帰って来られた。さっそく 48 度のラム酒で乾杯である。彼はウォッカ、ラム、コニャックを好みビールは飲まないようだ。オチョコ程度の小さなグラスに少し入れてちょびちょびと飲むスタイルだ。寒いロシアは体を温めることが先決。このような飲み方が合うのだろう。翌日から二日間、多くの村の方々と交流をした。村滞在中の我々の面倒を見てくださったリーダーのナターシャさんからこの村は 1957 年に集団移転で生まれたことなど村の歴史を教えていただいた。子どもたちによる民俗舞踊の披露や森の観察会、彫刻家の宅を訪問、そして村を離れる最後の夜はウデヘのお母さんたちが郷土料理を作ってくれて大懇親会が開かれた。美味しい料理をいただきながらウォッカも進み我々の調子が上がって来た。この村にも役者がいた。ハバロフスクで音楽を学んだオジサンがアコーデオンを肩に下げて登場した。この伴奏が始まるとさらにヒートアップし、ロシアの歌、日本の歌、踊りなど大い

に楽しんだ。

かつてテレビで世界ウルルン滞在記なるものが放映されていたことを思い出した。毎回日本で活動している芸能人がリポーターとなって海外でホームステイし、様々な事にチャレンジしていく様子をドキュメントとして放送し、その中からその国の文化や常識を紹介する。滞在は1週間程度のことが多い。今回はそれを地で行くような感じだった。

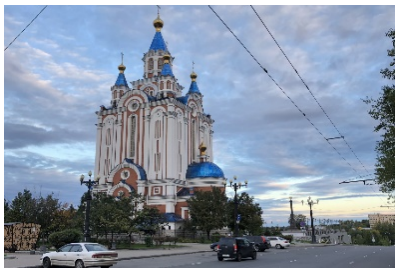
（正面）村の小中高一貫校
（左）　国立公園事務所

村に滞在中、天気は快晴で寒くもなく最高の日和に恵まれた。村からハバロフスクへの帰路、車窓からは来る時とは違って素晴らしい紅葉（黄葉）が見られた。季節の動きは実に早いものであった。

村の子どもたち

＜美しいハバロフスクの町＞

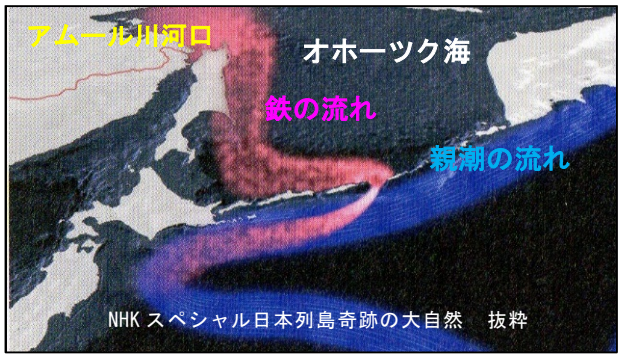
ハバロフスクはとても緑が多く美しい町だった。至る所に公園があり、街路樹も豊富だ。緑の量はロシアNO.1というのが頷ける。人口59万人、その中に23大学、13万人の学生が学ぶ若者の町でもある。もっとアジア色の強い町かと思ったが、建物はほぼヨーロッパ調である。しかし、住民は白人系からアジア系の人まで色々で、中には顔はアジア人だが目はブルーな人までいた。街中で私が道を尋ねられるほどなのでアジアの顔も日常的に見ているのだろう。これだけ混血化が進んだのは建前上かも知れないがソビエト社会主義時代の人種差別の無いすべての人民の平等的な扱いがあったからだという。また、車の渋滞が多い。乗用車はトヨタ、日産、スズキ、マツダの日本製の中古が溢れている。川舟もヤマハとスズキの船外機であった。猟師は日本製エンジンを絶賛していた。車と人が多い割には信号が少ない。信号のない道を渡るのに躊躇していると、車から先に止まってくれた。歩行者優先が浸透しているようだ。この町では夕食を二回とったがサワーク



リームを乗せたボルシチや鶏肉をチーズで包みパン風に油で揚げたもの、ワラビとシシ肉の炒めたものなどすべておいしくいただけた。

＜アムール川から地球規模の「森は海の恋人」を想像する＞

ハバロフスクに戻ってどうしても見ておきたいものがあった。それは大河アムールの流れである。我々が学ぶ地球環境自然学講座は森里海連環学を原点に置いているが、その学問展開のきっかけとなったのが、「森は海の恋人」運動である。これは今や日本を代表する自然環境保護運動の一つとなっている。そのモデルは岩手県一関市の室根山の森と気仙沼の海、そしてこの 2 つを繋ぐ大川という流程 24km の小さな川であり、森と海の切っても切れない関係性を「森は海の恋人」として漁師の畠山さんが植樹活動を通して示してきたものである。



今から 8 年ほど前に、「日本列島奇跡の大自然」という NHK スペシャルが放送された。その時に私は「アムール川からオホーツク海・親潮へと至る鉄の道発見」というテーマの放送に大いに感動をした。内容は次のようなものだった。北海道大学・白岩孝行准教授の報告文に沿って説明しよう。オホーツク海の南部から北海道の東にかけて広がる海域は世界の中で際立って大きな植物プランクトンの増殖地であることがわかってきた。この植物プランクトンを基礎として動物プランクトン、小～大型魚、海洋哺乳類が複雑にからみあって豊かな親潮とオホーツク海の海洋生態系を作っているという。この豊かさの説明は今までは、北海道東沖の場合は寒流の親潮と暖流の黒潮がぶつかり海水が上下にかき混ぜられて海洋深層から植物プランクトンの光合成に必要な栄養塩が上昇してくるからとされ、また、オホーツク海の場合は冬に形成される海氷に付着しているアイスアルジーと呼ばれる植物プランクトンの存在があるからだとされてきた。しかしこれと同じような海域は世界にも数多くある。その中で親潮域やオホーツク海だけが突出して豊かな植物プランクトンをなぜ育むことができるのかの明快な説明ができていなかった。

ここで着目されたのが海水中のフルボ酸鉄（水に溶解している鉄であることが重要）である。海の植物プランクトンはチッソ、リン、ケイ素を主な栄養塩として光合成を行っている。このうちチッソは多くの植物プランクトンでアンモニウムイオンの形態をしたものを利用している。その他の形態のチッソは利用されない。鉄イオンはいろんな形態のチッソを植物プランクトンが利用できるアンモニウムイオンの形態に変える働きがあるという。つまり鉄イオンがあればアンモニウムイオン以外のチッソも利用できるのでそれだけ植物プランクトンが多く増えるということが分かってきた。実際、白岩氏らによってこれらの海域にはこの鉄が際立って多く存在することが確かめられた。またその起源がアムール川から流出する河川水にあることも突き止められた。つまり、アムール川の樹林帯や湿地帯を通過した水がこの海域の豊かな海を支えているということである。ちなみにアムール川はモンゴル等の砂漠地帯を源流にしているが、鉄を供給する樹林帯や湿地帯はその支流ウスリー川流域のウスリータイガに多く存在すると今回の旅で実感した・・・。

ハバロフスクの郷土博物館近くの展望台からのアムール川はまるで海のように見えた。まだ河口まで直線距離でもざっと 750ｋｍほどもあるというのに・・・。この川から海に流出する水はとてつもなく膨

大な量である（表１参考）。まさに「森は海の恋人」が地球規模で起こっていると想像できるような大河であった。**表１　川の流程と流量等**

川　　名	流　程 (km)	平均流速 m^3 /sec	流域面積 (km^2)
アムール川	4,368	11,400	1,855,000
ウスリー川（アムール川支流）	897	1,150	193,000
ビキン川（ウスリー川支流）	560	246	22,300
信濃川（日本最長）	367	518	11,900
大川（※）	24	---	---

※岩手県室根山から気仙沼湾にそそぐ「森は海の恋人」の川

＜旅を振り返って＞

今回の旅では狩猟の民であるウデヘの人々に多大なお世話になった。ホームステイ、エコツアー、子どもたちによる樹木観察会や民族舞踊の披露、彫刻家のお話、交流会など実に盛りだくさんだった。

彼らが生活の場としてきたビキンの森と川が国立公園になり、そして今年は世界遺産になった。立派な公園管理事務所もできた。生活の場である森の伐採計画の見直しを訴えたことが生かされた。しかし、そうとはいえ単に森が残ったとしても、今後、将来にわたっての生活が保障されるとは限らない。それはロシアの辺境の地にも今の時代のライフスタイルが浸透してきているからである。狩猟だけではそのような生活は維持できない現実問題もある。このジレンマの中で、結局は国立公園として保護の道を選んだ。今後も狩猟は可能だとしてもその大義を損なわないために一定の制約を受けることになる。いろいろ考えた末での妥協点でもあったのだろう。

私には彼らは森との新しい関わり方を模索しているように見えた。私がステイした家庭はご夫婦と息子さんの３人が公園管理に関わっていた。聞くところでは村の多くの方が係わっているという。管理事務所の受付も交代で行うし、入園者による密猟などを防ぐための監視官も交代で行う。日本の世界自然遺産の何十倍という大きさの敷地の適正管理には多くの多様な人材が必要だ。そこに森のことに一番詳しいウデヘの人が関わることは理に適っている。日本の世界自然遺産はどこもアクセスが整備され、多くの来場者からの収入があり、観光産業の側面も見えてくるが、ここは日本とは根本的に違う気がする。エコツアーを含めて国立公園の本来の使命を果たしていくにはどう運営管理すればよいのか？彼らの生活の安定と合わせて模索しているように見えた。

ここに来る前に日本の世界自然遺産、白神山地に行く機会があった。青森・秋田の両県にまたがる遺産区域で青森県にはマタギ文化があった関係で、秋田県側とは対照的に入山をさせながら管理するスタンスを取っている。これはビキンの森を利用しながら守るスタンスと似ている。残念ながら、白神にはもうマタギはいない。しかし、この村ではまだ多くの方が狩猟をしている。家庭には冷蔵庫の何倍もの大きな冷凍ボックスがあり、中にはシカとシシ肉に魚がどっさり入っていた。食料品が町から入るようになったとはいえ、ここは辺境の地である。野菜や肉類などの日々の食料の大半は自ら確保することが

求められる。まさに彼らの生活には今後も狩猟が必要なのだと思った。これからも狩猟文化を維持しながら公園を管理されることを願っている。

現役をほぼリタイアした 11 人のシニア（大阪組・自然大学関係）に東京組 4 名（ヤング）が加わり楽しい旅となった。この中にはシニアとヤングにそれぞれ一組のご夫婦の参加もあった。ホームステイというスタイルだったので、15 名は 5 つの家庭にお世話になった。皆さん、ロシア語はちんぷんかんぷんだったようだが手まねやアルコールの力を借りて意思の疎通を図り、そして滞在中に随分と心が通じ合えるようになったとか。どのご家庭でも一生懸命にお世話してくださったようで感謝、感謝です。

大阪組の女性シニアのパワーが旅を和やかにしてくれた。彼女らにはヒマラヤに通った S さん、過去に 62 回の海外旅行を経験している K さん、そして、今までに 68 か国を回った F さんなど実に多彩であった。今回、小舟による長時間のクルージングや、寝袋によるキャビン泊など決して楽な旅ではなく、体力も求められた旅だったが、最後までタフな方たちであった。「悠々自適でよろしいですね」とお声をかけると、「定年まで精一杯働いた」「夫を早く亡くして、その後は私一人で子育てした」、「苦労したがよく頑張って来た」というお返事が返って来た。そうだったのだ。ようやく今の立場になったのだと思った。しかし、それだけではこの旅はできない。やはり思ったら行動するパワーが無ければ・・・。皆さんの行動力に敬意を表するとともに、ピヨピヨ者の私にいろいろ経験談をお聞かせいただいて大いに参考となった。これからも、体の動く限り一流の自然とそれを支える人々を訪ねて世界の果てまで行って Q をして下さい。昨年の経験をもとに有意義な旅にと事前にコメントをくださった田中先生、そして宮田社長さん、皆さん、大変お世話になり有難うございました。

ロシア辺境の地での自然保護活動など知る由もなかった我々に超一流の大自然を体験する機会を与えてくれた野口さんは、今回わざわざ成田まで見送りに来てくださった。彼は国際環境 NGO・FoE・Japan の

メンバーとして活動する中で、森やトラとともに生きる北方先住少数民族ウデヘの人々と出会い、自らガイド・案内役となってウデヘの人々やワイルド・ナビゲーションとともにエコツーリズムの取組をはじめ、㈱リコーとのタイガ保全プロジェクトがスタート、2009 年に NGO と企業の協働する「タイガフォーラム」を立ち上げ今日に至っている。その彼に感謝するとともに今後のご活躍をお祈りします。

＜参考にした資料及びＨＰ＞

●地球環境「自然学」講座 HP
29 年度地球環境自然学 第 3 回講演会「ウスリータイガの自然と文化」、講演会記録、ウスリータイガ自然観察会記録

●ウスリータイガ、ビキン川のほとりで（1）～（5）うみひるも（海の生き物を守る会メールマガジン）NO 209～213　地球環境自然学講座コーディネーター　田中克

●ウデヘ・企業経営による狩猟と森林開発　国立民族博物館　名誉教授　佐々木史郎

●ウスリータイガ国立公園 「ユネスコ世界自然遺産」 の自然と文化 ポケット版 （2018.9 版）自然大学　谷坂修二

●アムール川からオホーツク海・親潮へと至る鉄の道の発見　北海道大学低温科学研究所准教授　白石孝行　　NHK スペシャル日本列島奇跡の大自然　NHK「日本列島」プロジェクト編著 2011NHK 出版

●ビキン川森林地帯の旅 8 日間　ツアーハンドブック／旅のしおり、ポケット版「ビキンの樹木」

●タイガフォーラム HP

●FoE Japan　シベリヤタイガプロジェクト HP

●西田進のホームページ　ロシア沿海地方（ウデヘ族とビキン川の自然を訪ねる旅）